ジャングルにすむオランウータンは、枝をつかみやすい手足になっていて、生涯のほとんどを木の上ですごす地上最大の「樹上性哺乳類」だ。鳥や卵、シロアリなどの昆虫を食べることもあるが、植物や果実がおもな食べ物。果物、新芽、葉、茎、樹皮、樹液、キノコ、はちみつなどが好物。

家族で暮らすゴリラや群れで暮らすチンパンジーと異なり、オランウータンは基本的に単独で生きる。だが子どもや若者のうちは、集まって遊んだり行動を共にしたりすることも多い。大人どうしはあまり交流をしないものの、他のオランウータンを見分け、どこに誰がいるかわかっているといわれる。

体重が80キロ以上にもなる
巨大なフランジオスに近寄るのは
かなり気をつかう。
僕が危険な人間ではないことを、
分かってもらえるように心がける。
場所が変わればフランジオスも変わり、
それぞれの性格も異なる。
血気盛んな若いフランジもいれば、
穏やかな年老いたフランジもいる。
性格をよく見て
向き合わなければならない。

大きなのどぶくろで声を共鳴させ、
ロングコールという雄叫びをあげるのも特徴だ。
メスをよぶためのアピールと、
付近にいる他のフランジオスに対して、
「オレはここにいるぞ」と
伝えていると考えられている。

オスにくらべて
メスの体格は半分ほどで、
親しみやすい。
赤ちゃんは3年ほど母乳で育ち、
7〜10歳くらいになると
親離れする。
野生動物の親子がこれだけ長く
一緒にいることはめずらしい。
同じヒト科の仲間として、
人間に近いものを感じる。
オランウータンは
とても好奇心が強い。
人間を見なれた個体などは
撮影していると寄ってきて、
服を引っ張ったり、
髪をさわったりする。

あるとき、
幼い子どもを連れた
母子に出会った。

その一方、
行きすぎた開拓に歯止めをかけるため、
近年ではさまざまな保護活動が
活発になっている。
このままではいけないと考える
人や団体が増えてきているのは頼もしい。
でも、これまで受けたダメージは
あまりに大きく、
道のりは遠く険しい。